博士論文（要約）

H. アレントにおける「精神の生活」の政治性

—— 政治的主体化の教育に向けて ——

村松　灯

本論文の目的は、ハンナ・アレント（Hannah Arendt, 1906-1975）の「精神の生活（the life of the mind）」をめぐる議論を手がかりに、精神活動の政治性を明らかにすることである。

1990 年代以降、民主主義社会を構成する政治的主体、すなわち、市民（citizen）の育成を目指すシティズンシップ教育の重要性が論じられている。例えば、イングランドでは、政治学者バーナード・クリックが委員長を務めたシティズンシップ諮問委員会の報告書を受けて、2002 年から中等教育段階で教科「シティズンシップ」が必修化された。日本においても、すでに多くの研究や実践が積み重ねられている。近年では、選挙権年齢の引き下げといった時事的状況も加わり、シティズンシップ教育の役割が改めて強調されつつある。

本論文では、シティズンシップ教育において育成されるべき市民的資質（citizenship）として精神活動に着目し、その政治的意義を考察する手がかりとして、アレントの「精神の生活」論を検討している。彼女は、第二次世界大戦後のアメリカで活躍したドイツ系ユダヤ人の政治思想家であり、人びとの「複数性」を軸とした独自の政治論を展開したことで知られるが、1961 年のアイヒマン裁判以降は、精神活動を中心的な主題とした。「精神の生活」とは、思考、意志、判断という三つの基本的な精神活動のことである。本論文の主眼は、後期アレントの「精神の生活」論について、前期の政治論と架橋しつつ解釈し、精神活動が政治的実践や公共的な世界とどのような関係にあるのかを検討することにある。

そこで第一章では、思考論を対象に、思考に対するアレントの問題関心がどのようなものであったかを確認したうえで、彼女の論じる思考の特質を検討し、その政治的意義を考察した。

後期アレントにおける思考の問題は、アイヒマン裁判を直接的な契機として、道徳や倫理、良心との関係から前景化してきた。だが、「活動的生活」と「観照的生活」に関する西欧哲学の伝統的な理解を批判的に問い直すという意味においては、彼女の問題関心は前期から通底しているといえる。

アレントにおける思考は、世界から退却し孤独のなかで営まれる、きわめて非政治的な精神活動である。だが、本論文において明らかになったのは、思考は非政治的であるがゆえに政治性を有するということである。その政治性は、1）良心による参加の拒否が、政治的な非常事態においては、むしろ一種の活動（action）になりうるという点や、2）思考による既存の道徳的規範や価値基準の「破壊」によって、判断力が解放されるという点、3）思考において、責任の主体たる人格が準備される点に示される。

第二章では、意志に関する議論を検討した。アレントの意志論の解釈には困難が伴う。それは、方法論上の問題によるところもあるが、『精神の生活』第二巻「意志」の最後で、議論が「袋小路」に入り込んでしまったことを彼女自身が指摘しているということが大きい。本論文では、この「袋小路」が何を意味しているのかを、アレントの意志論のなかから内在的に検討した。

アレントは、アウグスティヌスが「始まり」の問題に取り組み、意志をまったく新しいことを始める能力として理解する可能性を開いた点に着目する。アレントはアウグスティヌスの議論に依拠しつつ、新しいことを始めることができるという自由は、「出生」の事実に基づくと論じている。私たちは、絶対的に新しい人格としてこの世界に生まれる。言いかえれば、私たち自身が新しい「始まり」なのであり、アレントはこの事実に意志の自由の根拠を見出したのである。だが、こうした意志の理解にしたがえば、人間の自由や自発性は、私たちがこの世界に生を享けたという根源的な受動性によって基礎づけ

られていることになる。意志の「袋小路」が示唆するのは、この「自由の運命性」という問題である。

本論文では、アレントの議論に二重性の構造が見出されることから、この袋小路の意味を考察した。意志の袋小路は、「始まり」と「始める」こととの溝を意味しており、両者が架橋されるためには、他者という契機が求められる。私たちは常にすでに新しい「始まり」であるが、同時に、他者とともに「始める」ことへと導かれねばならないのである。意志は、私たちが自由でありうることの存在論的条件であり、政治的なものの存在論的条件である。だが、意志の自由が真に実現されるのは、活動と判断においてであるといえるだろう。

第三章では、判断論を検討し、判断に固有の思考様式とされる「再現前化思考（representative thinking）」に、公共的な世界を更新するはたらきがあることを明らかにした。

アレントの判断論については、カントからの影響をどのように評価するかが解釈上の争点の一つとなってきた。本論文では、アレント独自のカント解釈を検討し、彼女がカントの『判断力批判』での議論を、より経験的・個別的な文脈を強調する形で読み替えたと同時に、「世界市民」の理念に象徴されるような普遍性への志向も残していることを明らかにした。言いかえれば、彼女の判断論には、アリストテレス主義的要素とカント主義的要素が並存しているのである。本論文では、この並存によってはじめて共同体の「外部」の領域が生じうるという点に着目し、「再現前化思考」としての判断において再現前化されるのは、この「外部の他者」のパースペクティヴであるという解釈を示した。「外部の他者」を再現前化することは、所与の共同体において、いまだ見られ聞かれていないものに応答することである。公共的世界の存続と更新は、新たなパースペクティヴがもたらされることに、言いかえれば、いまだ不在のものの到来に賭けられているとアレントは論じる。こうした点に鑑みれば、判断において、「外部の他者」を再現前化することには、重要な政治的意義があるといえる。

最後に、補論では、『精神の生活』第二巻におけるアレントのハイデガー解釈を検討した。アレントが論じるところにしたがえば、ハイデガーのもともとの「転回」は、ニーチェの「力への意志」を拒絶したときに生じたという。ハイデガーは、すべてを統治し支配しようとする力としての意志を否定し、「意志しない意志」としての思考を対置させる。だが、こうした「思考と意志の緊張関係」というモチーフ自体は、ハイデガーに固有のものではない。アレントによれば、ハイデガーの独自性は、こうしたモチーフを先鋭化させ、思考と活動とを徹底的に脱主体化したことにある。現象の世界における人間事象のすべてを形而上学的実在のはたらきとして説明し、人間事象から活動主体としての人間を奪うことは、アレントにとって自由の否定を意味した。彼女のハイデガー批判の要点は、まさにこの点にある。

本論文では、シティズンシップ教育において育成すべき市民的資質に関する議論に対して、アレント思想から示唆を得ることを目指して、彼女の「精神の生活」をめぐる議論を検討してきた。このことに鑑みるとき、本論文の意義は大きく分けて以下の二点にあるといえる。

第一に、精神活動には、実践とは異なる政治的意義があることを明らかにしたことである。各章において明らかにされた「精神の生活」の政治性によって示唆されるのは、精神活動もまた、実践と同様に、私たちの政治的な生を形づくっているということである。ただし、その仕方は実践とは異なっている。精神活動には、固有の政治性があるといえるだろう。

第二の意義は、精神活動の複数性を明らかにしたことである。アレントの議論は、精神活動には原理の異なる複数の位相があるということを示唆している。

これらの点をふまえれば、これまでの議論のように、精神活動と政治的実践を連続的に把握することはできないし、精神活動の複数性を曖昧にしたり、共約不可能であるはずの精神活動を、実践との近さ遠さによって発達段階的に把握したりすることも、批判されねばならないだろう。アレントの議論を検討することを通して明らかになったのは、私たちの生は多様な次元ないし回路によって政治的なものと結びついているということである。政治的主体化の過程もまた、そうした多様な次元ないし回路に応じて、複線的に経験されるものと考えられる。もしそうであるとするなら、政治的主体化の教育もまた、複線的に考えられねばならない。

ここで問題となるのは、精神活動の教育可能性である。特に、思考については困難な課題を孕んでいる。というのも、アレントにしたがえば、思考は、世界からの退却と、すぐれて自己目的的であることによって特徴づけられる精神活動であり、教育になじみにくいと考えられるからである。しかし、ここで改めて問うべきは、「教育」の意味であろう。思考の特質をふまえれば、私たちにできることは「思考を触発する」ことだけである。「教育すること」を「触発すること」と見なすことは可能だろうか。思考の教育可能性を問うことは、触発としての教育の可能性を問うことでもあるといえる。この問いに応えることは、本論文において残された課題のひとつである。

また、本論文では、政治的主体化の教育が複線的に考えられねばならないことを示唆するにとどまっており、実践イメージを提示するには至っていない。本論文で明らかにされた精神活動の政治性をふまえて、具体的にどのような政治的主体化の教育が可能かについては、さらなる検討が必要である。